

【ミサを生きる】(3)

※ミサにおける主イエス・キリストの現存

(「ミサの鑑賞—感謝の祭儀をささげるために—」吉池好高 オリエンズ宗教研究所)より

「これをわたしの記念として行いなさい」。イエス・キリストのこのことばに従い、最初の弟子たちから始まって今日にいたるまで、教会はミサを続けてきました。この営みが、イエス・キリストを信じる者たちの二千年にわたる歴史を、イエス・キリストにさかのぼる形で結んでいるのです。このミサの歴史が教会の中心を貫いていることによって、教会はイエス・キリストに結ばれているのです。

ミサはイエス・キリストの記念です。福音書にあるように、かつてパレスチナの地で、あのような生涯を生き、最後は十字架につけられて死んだ、しかし、死者の中から復活したイエス・キリストの記念です。その始まりは、弟子たちの心に焼きついた、何をもっても消し得なかったイエス・キリストの記念です。一つの食卓である祭壇を囲んで、イエスのこの記念を行うたびごとに、イエスは今も自分たちの中にいてくださることを、彼らは信仰において感じ取っていたのです。弟子たちに続くキリスト者たちは、ミサの形とそれが意味していることを、弟子たちから継承することによって、ミサに対するこのような信仰をも受け継いだのです。そうでなければ、このような長い歳月にわたって、この祭儀がけいしょうされることはなかったでしょう。

従って、カトリック信者にとって、ミサは教会の大切な儀式であるにとどまらず、自分たちのイエス・キリストへの信仰を宣言する信仰の形なのです。この信仰において、私たちは、ミサの中にイエス・キリストを最も身近に感じ取っていくことができるのです。「わたしの名によって集まる所には、わたしもその中にいる」(マタイ 18・20 参照)。かつて弟子たちに約束されたイエスのこのことばは、ミサの場において、自分たちにも実現されているのだと実感をもって受け入れられるのです。

しかし、ミサにおけるイエス・キリストのこのような臨在感は、私たちの信仰のみに基づくものではありません。つまり、私たちがイエス・キリストの記念としてミサを執り行い、イエスを思い起こすという、そのことによって、イエスが私たちの意識の中に存在するというの

ではありません。そのような側面がないわけではありませんが、根本的には、「これをわたしの記念として行いなさい」というイエスの命令がなかったなら、ミサはなかったことになります。ミサをささげているのは私たちですが、そのミサをミサとして成り立たせているのはイエス・キリストであるといえるのです。

(「ミサの鑑賞—感謝の祭儀をささげるために—」吉池好高 オリエンズ宗教研究所)